

博士の愛した数式

2006(平成18)年1月22日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★★



監督・脚本=小泉堯史/原作=小川洋子/出演=寺尾聰/深津絵里/吉岡秀隆/齋藤隆成/
浅丘ルリ子(アスミック・エース エンタテインメント配給/2006年日本映画/117分)

……オレは数学がキライだったから法学部に入り弁護士になった。そう自負(?)している私だが、この映画を観てあらためてくっきりと思い出したのは、中学1年生最初の数学の授業風景。もしあの時、ルート先生のような授業にめぐりあっていたら……? オレは今ごろ弁護士ではなく数学者……? 国語だけではなく数学のレベル低下が問題となっている昨今、愛をもって数学に接し、愛をもって人に接することのすばらしさを、この映画からしっかりと実感したいものだ。

『キネマ旬報』の巻頭特集は……?

本作は『キネマ旬報』2月上旬号の巻頭特集に位置づけられ、さらに同誌の「今月のピンナップ」には深津絵里が……。この映画のテーマは、日本人が本来持っていた「美しさ」と「清らかさ」。そして人間に対する「温かい気持」。注目されるのは、「黒沢組」を自認する小泉堯史監督と寺尾聰が、『雨あがる』(00年)、『阿弥陀堂だより』(02年)に続いてコンビを組んだ作品だということ。

「1975年の交通事故によって脳損傷を受けるまでの記憶はバッチリ」だが、その後に起きたことは「80分しか記憶が続かない」という後遺症は、ちょっと想像しづらいもの。こんな人物像を創造して、2004年に「第55回読売文学賞」と「第1回本屋大賞」をダブル受賞した原作者の小川洋子氏について、同誌は「書籍が売れなくなったと言われるこの時代に、折りにふれ何度でも読み返したくなる読書体験を味わわせてくれる稀有な作家」と誉めているが、さてそんなキャラの博士が、映画の中でどのように表現され、観客にどのような感動を与えてくれるの

だろうか……？

浅丘ルリ子の今昔……吉永小百合らと比較して

1960年代はじめ、私が中学生時代に「通って」いた、3本立て55円の日活系映画館で観ていた映画のメインは吉永小百合と浜田光夫の純愛コンビ。小百合ちゃんの同僚ないし後輩格が松原智恵子や和泉雅子ら、他方石原裕次郎や二谷英明らに絡む先輩格女優が浅丘ルリ子や芦川いづみらの面々。したがって、石原裕次郎がデビュー後すぐに「モノにしてしまった」北原三枝の勇姿(?)は、私はリアルタイムで観ていない世代。

あの時代、スリムで目が大きく、日本人離れした顔立ちの浅丘ルリ子は、日活女優の中で飛び抜けて美しかったが、その華やかな美しさを最も発揮したのが、『戦争と人間』(70~73年)における伍代由紀子役。いわば、日本のオードリー・ヘップバーンのようなイメージなのだが、絶頂期のヘップバーンと晩年のヘップバーンを比べると、男の私には正直言って少しゾッとする感じも……。そんな浅丘ルリ子も今や60何歳……。この映画で彼女は「演技派女優」としての力量を如何なく発揮しているが、私には逆にそれが少しさびしい感じも……。もちろん、そんなことを言っちゃ失礼なことはわかりつつ……？

こんな授業があったなら……？

この映画は数学の教師として赴任してきた新米のルート先生(吉岡秀隆)が、「今日は自己紹介をします」と生徒たちに語りかけるシーンから始まる。その自己紹介で語られる内容は、単なる生い立ちや経歴だけではなく、①数字にはどんな意味があるのか、②なぜルートと呼ばれるようになったのか、③なぜ数学が好きになり、教壇に立つことになったのかなど、多岐にわたるもの。そしてその行き着くところは、「オイラーの公式」の紹介だが、そこでルート先生が訴えるものは単なる数学の知識ではなく、人間の生き方や支え合いの大切さ。感受性豊かな中学1年生の最初の数学の授業は、実に大切。なぜなら、その最初の授業の印象によって、数学を好きになったり嫌いになったりする傾向が大きいから。私の中学1年生の時、こんな数学の授業があったらなあ……？

ルート先生の対極にあったもの……

1961年4月に私が入学した愛光中学は、男子ばかりの中高一貫教育の進学校。そこで私が最初に受けた数学の授業は最悪だった。ルート先生と同じように新任の若い男の先生で、早口に進めていくその授業はいかにも自信たっぷりだが、私にはサッパリ理解できないもの。そして松山弁（田舎弁）をしゃべっている生徒たちに対して、東京暮らしが長いのか、多少バランメエ調だったこの先生の口グセは、「この問題、きわめて簡単だよな」というイヤミたっぷりなもの。「あんたには簡単でも、俺にはサッパリわからん！」と思いつつ何週間かが過ぎ、テストの結果を見ると何とも無惨な有り様。私の他にも落第点をとる生徒が続出。もちろん、それでも優秀な成績をとる頭のいい生徒も一部にはいたのだが、私たち出来の悪い生徒とその親たちの不平不満が鬱積し、それが苦情となって集約された結果、その先生は交代することに……。今となれば、断片的にしか覚えていない懐かしい記憶だが、あの時はじめて体験した劣等感や悔しさは今でもハッキリと……。

メチャ面白い化学の授業だったが……

悪い印象しか残らなかった数学の第1回目の授業に対して、生徒全員がゲラゲラと腹を抱えて笑いながら興味を持たせてくれたのが、化学の授業。その第1回目のテーマは、「火はなぜ燃えるのか？」というもの。「燃える元素」があり、その元素とは〇〇だ、いや△△だという論争を、昔の化学者たちがいろいろと展開したこと。そして過程の中で次第にその化学的説明が進められていったことを、落語家顔負けの独特の軽妙な口調で語る授業はホントに面白く、これで生徒たちはみんな化学が好きになったはず。理数系が嫌いなため文系に進んだ私だが、高校に入ってから全くと手に負えなくなった「物理」に対して、「化学」の授業はあまり抵抗感なく受け入れられたのは、この中学1年生の最初の授業のおかげだと確信……？

あなたは対応可能……？

80分しか記憶が持続しないことを自覚した博士（寺尾聰）が、他人との対話が苦手になるのは当然。しかし、対話が大変なのは相手方も同じ……？ だって博

士の対話の相手方は、会うたびに同じ話を何回もしなければならぬのだから……。さしずめ、私などはよほど用心して自分をコントロールしない限りこの博士とは対話できず、「その話は昨日したやろ！ 同じ話を何回もするな！」と怒鳴ってしまいそう……。深津絵里演ずる家政婦は、「義弟」「義弟」を連呼する博士の義理の姉の未亡人（浅丘ルリ子）から、面接の際、それを十分聞かされていたから、会うたびに同じ話をすることへの心構えが十分できていたうえ、それができる人間的な優しさを備えていたから、対応可能だった。しかしさてそれがあなたなら、対応可能……？

「潔い」「美しい」は多少押し売り気味……？

そんな博士が、他人とのつながりや他人との会話をスムーズに進めるため考えたのは、自分が数学者であることを前提としたうえで、数字をネタとした会話をすること。数字をネタとした会話は、年齢、生年月日、身長、体重（？）、結婚記念日、子供の年などいくらでもあるが、博士が会うたびにいつも家政婦に聞くのは、名前ではなく靴のサイズ。彼女が「24cmです」と答えると、そこから「ほお、実に潔い数字だ。4の階乗だ」という難しい会話がいともスラスラと……。

もちろん原作や脚本がうまくつくられていることによるのだが、数字をネタとしたこんな数学者との対話がスムーズに進んでいく中で、観客に示される難しい数学的知識が「階乗」のほか、「素数」「自然数」「完全数」「友愛数」など。阪神タイガースのエースであった江夏豊の背番号28の完全数としての「美しさ」や、家政婦の誕生日の220と博士が賞を受けた順番である284との友愛数の「美しさ」を、博士はさかんにアピールするが、さてあなたはホントにこれらの数字をそんなに「潔い」とか「美しい」と思う……。博士のセリフは多少押し売り気味では……？

家政婦姿オンリーはちょっと……？

私が思うに、演技派として定評のある深津絵里はかなりの美人。第27回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した『阿修羅のごとく』（03年）では、彼女は気の弱い、男に縁の薄い三女役を演じたから、私の印象では、「あんな感じの女優か」と思っていたが、その後あちこちで観る彼女の美しさにビックリ……。

それはこの映画でも同じで、10歳の子供が1人いるとしてもこんなに若くて美人そして真面目によく働く家政婦がいるのなら、私の家でも是非雇いたいくらい……。

そんな美人で演技派の深津絵里だから、小泉堯史監督の要求どおりの演技をきちんとこなしているが、少しもの足りないのは、その美しい姿が1度も登場しないこと。いつも元気で明るく働いている家政婦という役柄だから仕方ないのかもしれないが、印象に残るのは、力強く自転車をこぐシーンだけ……？ 何よりも残念なのは、この映画ではずっとパンツ姿、エプロン姿の彼女ばかり観せられること。ストーリーを散漫にさせてはダメだが、少しでもいいから彼女の恋愛、結婚そして夫との別れ(?)のストーリーを挿入してもらい、美しい深津絵里を観せてほしかったと思うのは、やはり私がスケベだから……？

数学における論理性は法学部生や弁護士にも不可欠……

この映画を観てよくわかったことは、数学は決して味気ない学問ではないということ。そして、ひょっとして、考えれば考えるほど、研究すれば研究するほど面白くなる学問なのかもしれないということ。多分、数学で何より必要なのは論理性。なぜなら、 $1 + 1 = 2$ を大前提として、 $2 + 1 = 3$ が成り立つのだから……。

他方、弁護士生活を31年間やってきた中で痛感するのは、論理的考え方の必要性和、それができない日本人が多いことへの苛立ち。もちろん数字や数式の世界での論理性と言語の世界での論理性は、その「表れ方」や「表し方」に大きな違いはあるだろうが、きっと本質は同じはず。この映画の中で示される博士の論理性とそれを受け継いだルート先生の論理性は、そのソフトな語り口とセットになれば誰でも親しめるもので、学びやすいもの。そんな観点からもこの映画をしっかりと鑑賞し、法学部の学生諸君の論理性の向上にも役立ててもらいたいものだが……。

ホントにオヤジそっくり！

博士を演ずる寺尾聰は、『キネマ旬報』2月上旬号のインタビューで「この作品は迷わず僕の代表作だと言えます」と語っているが、これはかけ値なしの本音と受けとってもいいと思えるほど役にはまり切っていることがよくわかる。1947年生まれ、団塊の世代代表(?)の寺尾聰の心境を正直に表現できた作品がコレ

なのだろう。江夏豊や村山実を懐かしく思い出すのは、1949年生まれの私も同じ。さらに、彼が歌手として1981年にリリースした『ルビーの指輪』が大ヒットさせ、レコード大賞を獲得したあの時代を懐かしく思い出すのは、団塊の世代共通のはず。

そんな私がこの映画を観てつくづく思うのは、本当にオヤジそっくりになったナということ。野村芳太郎監督の追悼記念特集で、1月9日に観た『迷走地図』（83年）における宇野重吉と寺尾聰の親子共演は、息子にとって貴重な体験のはず。そして今や顔つきだけではなく、その演技スタイルや雰囲気も、この映画を観ていると完全にオヤジの宇野重吉そのもの。人間のアイデンティティはホントにすごいものだとは感心しつつ、そういえば、あいつもこいつも今はオヤジそっくりになったなあと思うことが最近多い……。とすると、この俺だって、周りから見ればオヤジそっくり……？

数学嫌いの女性客たちは？

1週間だけの上映で前宣伝も少ない、割と地味な映画ながら、公開翌日の日曜日の夕方、道頓堀東映パラスの観客の入りはほぼ7割で、私の予想以上。そんな中私のすぐ近くに座っていたのが、珍しく若い女性の2人連れ。なぜこんな映画にと納得いかない(?)まま、上映前の2人のバカバカしいおしゃべりを聞くとはなしに聞いていたが、面白かった(?)のは、映画終了後の数学についての2人の会話。

私も数学嫌いだったが、この映画を観て、またルート先生の心温まる授業を聞いて、素数、階乗、完全数などの概念を思い出しながら確認し、計算もしていた。したがって、そこで語られるセリフはおおむね理解できていたし、なるほどこうやって考えると数学も結構面白いものだと思えるようになり、よかったなと感じていたもの。ところがこの2人の女性客は、そんな私の数学レベルよりもずっとずっと下だったようで、「何を言ってるのかサッパリわからなかったねえ……」という成果ゼロの会話。これではひょっとして、彼女たちはルート($\sqrt{\quad}$)の計算もしたことがないのでは……？ 小学校・中学校でもう少しマシな数字や数学についての基礎教育をする必要性を、この女性客のこの会話から痛感したので、この場を借りて強くアピールしておきたい。 2006(平成18)年1月24日記